カラホト出土のカダム派関係写本

井　内　真　帆

1　はじめに[1]

20世紀初頭，カラホト Khara khoto（「黒水城」）及びエチンゴル Etsin gol（エチナ河）周辺より[2]，膨大な数の写本と版本が発掘された。これら出土文書の一部，中でもカラホト出土の文書は，11世紀初めにタングート族によって建国された西夏王国（1032-1227）の遺物であった。

西夏王国は，李元昊（1003-1048）の時代，東西交通の要所であった河西回廊を占領し，その利益を得て繁栄したが，1227年にはチンギス・ハーン（在位1206-1227）により滅ぼされた。王国の存在は約200年という大変短い期間であったが，その期間に独自の文字である西夏文字が作られ，さらには多くの仏典が漢語やチベット語から西夏語に翻訳されるなど，独自の文化を展開した[3]。

カラホト及びエチンゴル出土文書は，仏典，儀軌，手紙，暦などその内容はさまざまである。言語についても，西夏語，チベット語，漢語，モンゴル語などがあり，その言語の多様性は，カラホトとエチンゴルの地が多くの民族が往来する交通の要所であったこと，そして時代とともにその支配者を変えていったことを物語っている。

本稿は，カラホト出土のチベット文書の概要を示すとともに，カラホトの城壁隅に位置する仏塔より出土した蔵外文献，カダム派 bKa' gdams pa に関する写本を通して，西夏に伝わったチベット仏教の影響の一端について考察するものである。

2　先行研究と問題の所在

近年，カラホト出土の西夏文及び漢文文書を用いた西夏研究は飛躍的な進展を遂げており，それは文書の図版の出版や公開など，文書へのアクセスが容易になったことと関係している[(4)]。しかしながら，チベット文については，発掘者である A. スタイン（1862-1943）が，著書 *Innermost Asia*（Stein 1928）において，数点の文書の写真を掲載している以外は，文書に対するアクセスが今も容易ではない[(5)]。したがって，チベット文書の研究状況は西夏文及び漢文文書のそれと大きな隔たりがあり，その概観についても，これまで武内（2002）が紹介しているのみで[(6)]，個々の文書の研究はこれからである。

これまで，筆者は，チベット文書の所蔵先である大英図書館 British Library とロシア科学アカデミー東方学研究所・サンクトペテルブルク支部 Institute of Oriental Studies, St. Petersburg Branch of the Russian Academy of Science を訪れて調査を行い，文書の全体像の把握に努めてきた。そしてその作業の中で，僅かではあるが，個々の文書の年代や内容が明らかになり，大英図書館所蔵のチベット文書の中に，蔵外文献，しかもカダム派に関係すると思われる写本を見出した。

これまでの西夏研究において，西夏語の大蔵経の中にチベット語からの翻訳が多く存在することは早くから指摘されていた[(7)]。しかしながら，西夏に伝わった大蔵経以外の文献，すなわち蔵外文献の存在や，西夏仏教とチベット仏教の関係，さらには西夏に影響を与えたチベット仏教の内容にまで触れる研究はほとんどされてこなかった[(8)]。そして西夏研究以外の先行研究においても，西夏とその後のモンゴルの仏教に対して，チベット仏教の中でもカギュ派 bKa' brgyud pa（その中でもカルマ派 Karma pa）とサキャ派 Sa skya pa の影響が大きいことは周知のこととされてきたが[(9)]，カダム派の影響についてはこれまで全く注目されてこなかった。したがって，本稿で紹介するカラホト出土のカダム派に関するこの写本は，これまで明らかではなかった西夏へのチベット仏教の影響の一端を明らかにする非常に重要な史料である。

3 カラホト出土のチベット文書

3.1 所蔵状況

現在，カラホト及びエチンゴル出土のチベット文書の大部分は，大英図書館の Asia, Pacific & African Studies とロシア科学アカデミー東方学研究所・サンクトペテルブルク支部の二カ所に所蔵されている。

先ず，大英図書館所蔵分については，これらは，スタインによって1913年から1915年にかけて行われた中央アジアへの第３次探検の際に持ち帰られたものである（以下，スタインコレクション Stein Collection）。現在，文書は12の箱に分類され保管されており，IOL Tib M 1から12の請求番号（requisition number）が付されている[10]。さらに文書毎に，発掘者であるスタインによって，カラホト城塞付近より出土したものには「K.K.」（=Khara khoto の略号），エチンゴル周辺より出土したものには「E.G.」（=Etsin gol の略号）の出土地番号が付けられている。筆者が2002年から2006年まで行った調査によれば，スタインコレクションには K.K. 及び E.G. 番号のチベット文書は1056点ある。内訳は，K.K. 番号が278点，E.G. 番号が760点であり，出土地番号が付されていない文書は18点ある。

一方，ロシア科学アカデミー・サンクトペテルブルク支部所蔵分は，P.K. コズロフ（1863-1935）率いる探検隊が，1907年から1909年にかけて発掘調査を行い持ち帰ったものである（以下，コズロフコレクション Kozlov Collection）[11]。コズロフの探検隊が発掘を行ったのは，スタインの探検隊よりも７年ほど早く，そのため，スタインコレクションよりも状態の良好な文書が含まれている[12]。文書は，同機関により「XT」（＝ロシア語の Xara xoto Tibetskij の略号）という番号が付けられて整理されている[13]。しかしながら，コズロフ自身は，スタインのように文書毎に出土地番号を付していないため，文書がカラホト出土であるか或いはエチンゴル周辺出土であるか出土地の詳細は不明である[14]。

さらに，上記の２つの研究機関以外でも，筆者は2005年に内モンゴル自治区にある内モンゴル・エチナ旗文物管理所を訪れた際，同機関が38点のカラホト及びエチンゴル出土のチベット文書を所蔵することを確認しており，他にも内

モンゴル文物考古研究所などにもカラホト及びエチンゴル出土のチベット文書が所蔵されていることがわかっている。[15]

3.2　スタインコレクション K.K. 番号のチベット文書

本稿で取り上げるのは，スタインコレクションのチベット文書，中でもカラホト出土を示す K.K. の出土地番号を持つ文書である。ちなみに，同コレクションの内，大半を占めるのがエチンゴル出土の E.G. 番号の文書であるが，そのほとんどが西夏時代以降，中には20世紀のものと思われる文書もあるので，E.G. 番号の文書は今回は取り扱わない。

K.K. 番号のチベット文書について述べれば，スタインは K.K. の下位の番号として，カラホト城塞内外の６つの出土地それぞれに番号を付している。その番号は，K.K.I から K.K.VI まであり，K.K.I はカラホト城塞内，K.K.II から VI はカラホト城塞外である。この内，チベット文書が多く出土したのは，K.K.V であり，他にも K.K.II と K.K.I.ix[16] の２カ所からもチベット文書が出土している。

K.K.V は，城塞外側の西北隅にある仏塔を指し，そこにはａとｂの２つの仏塔がある。本稿で取り上げるカダム派に関する写本が出土したのはｂの仏塔である（出土地番号 K.K.V.b）[17]。この仏塔からはチベット文書と一緒に西夏文書も多く出土しており[18]，また文書と一緒に絵画類も出土していることが特徴的である[19]。K.K.II は，城塞外の廟堂であり[20]，この K.K.II からもチベット文書と一緒に西夏文書が出土している。K.K.I.ix は，城塞内にあり[21]，ここからは西夏文書は出土していないものの，チベット文書の他に，片面にチベット文，片面に漢文の２言語文書が出土している[22]。

4　カダム派関係写本

現在わかっているだけで，K.K.V.b（カラホト城塞外側の西北隅に位置する仏塔）より，２点のカダム派関係の写本が出土している。１つは文書番号「K.K.V.b.035.b」の１片，１つは文書番号「K.K.V.b.021.c」（参考図版を参照）をはじめとする５片である。前者の K.K.V.b.035.b は，奥書の記述から，ゴク・ロ

デン・シェーラブ rNgog blo ldan shes rab（1059-1109）[23] 著の *rGyud bla ma'i don bsuds* であることがわかっており[24]，これには既に Kano（2008）の研究がある。本稿では後者の K.K.V.b.021.c をはじめとする5片の写本を取り上げる。

K.K.V.b.021.c をはじめとする5片の写本は，ウメ dbu med 体（草書体）で書かれたペジャ dpe cha（貝葉）のスタイルで，5片の中で最も大きな K.K.V.b.021.c（参考図版）のサイズは，縦10.0 cm ×横 34.0 cm である。書体や紙のサイズ，内容から判断して，同一文献と思われる文書4片が同じ出土地（K.K.V.b）から出土しており，それぞれ文書番号は，K.K.V.b.011.c, K.K.V.b.034.b, K.K.V.b.09.f, K.K.V.b.09.i である。K.K.V.b.021.c のマージンに「ka, 49」，さらには K.K.V.b.011.c のマージンに「ka, 53」とあることから，この文書が53葉以上から成るものであることがわかる。しかしながら，表紙と奥書が存在しないため，タイトルと著者は不明である。

この写本に関して，Stein（1928）に言及は見られず，これまで研究は行われていないようである。この5片の写本を見てみると，まず第一に，ゲシェー・トンパ dGe bshes ston pa（ドムトンパ 'Brom ston pa rgyal ba'i 'byung gnas, 1004/1105-1064）[25] やポトワ Pu to ba（Po to ba rin chen gsal, 1031-1105）[26]，チャユルワ Bya yul pa（gzhon nu 'od, 1075-1138），ネゥスルパ sNe'u zur pa（ye shes 'bar, 1042-1118）などの人名が頻繁に現れることに気が付く。これらの人名は全て，「後伝」phyi dar の初め，11世紀中頃にチベットにおいて成立したカダム派の祖師たちの名前である。また，この5片の写本には「（カダム派祖師）の御口より～」zhal nas ～（カダム派祖師は～とおっしゃった）という文章が繰り返し見られることも特徴である。以下，特徴的と思われる該当部分の一部を抜粋する[27]。

K.K.V.b.021.c（ka, ff.49a 7-8）

bya yul pa'i zhal nas mi mu stegs can bya ba rang gyi bla ma'i lta spyod sun byin pa de la zer de dang rnam pa thams cad du mi 'grogs gsung/...

チャユルワは，「外道というのは自身のラマの見解と行いを批判する者をいうのであって，いかなる時も親しくするな」とおっしゃった

K.K.V.b.021.c（ka, ff.49b 8-9）

bya yul ba'i zhal nas zla gzas 'dzin pa'i dus su dus gzhan las khri 'gyur gyis bsod nams che ba yin/...

チャユルワは，「月食の時〔供養をすれば〕他〔の時〕より１万倍〔得られる〕福徳は大きい。日食の時は10万倍〔得られる〕福徳は大きい」とおっしゃった

K.K.V.b.011.c（ka, ff.53a 1-2）

dge bshes ston pa'i zhal nas skyabs 'gro shor na sdom pa gzhan rnams mi 'chor sbang ro bzhin du nus med du 'gro ba yin skyabs 'gro sor chud na sdom pa gzhan rnams kyang sor chud pa yin/...

ゲシェー・トンパ（ドムトンパ）は，「帰依を失えば他の戒律も失い，酒粕のように威力がなくなる。帰依が回復すれば他の戒律も回復する」とおっしゃった

カダム派の著作の中には，『ペチュー』*dPe chos* や『ベゥブム・ゴンポ』*Be'u bum sngon po* に代表されるように，断片的に伝わったドムトンパやポトワなどの初期カダム派祖師たちの言葉を，後の弟子たちが集めて編纂し，一つの著作にまとめたものが多い[28]。同様に，「スントルブ」gsung thor bu（或いは gsung sgros thor bu,「断簡」）と呼ばれる著作のジャンルも，断片的に伝えられた祖師たちの言葉や法話を収集整理したものであり[29]，それらの著作の中には共通して，上に挙げた５片の写本の中に見られるような「（カダム派祖師）の御口より～」といった祖師の言葉を引用する文章が多く見られる。

これらのカダム派の著作やそのスタイルが成立したのは，著者（或いは編者）の年代から推測すれば，おおよそ12世紀から13世紀前半頃までと考えられる[30]。『ペチュー』の中本である『ペチュー・リンチェンプンワ』*dPe chos rin chen spungs pa*（Toh.6964）を編纂し，且つカダム派のスントルブの著作 *bKa' gdams skyes bu rnams kyi gsung sgros thor bu rnams*[31] などを著した（或いは編

纂した）チェゴムパ lCe sgom shes rab rdo rje（ca. 1140/50-1220）[32] はその時期の人物である。[33]

仮に，K.K.V.b.021.c をはじめとする5片の写本が，上に挙げたようなカダム派の著作と同様のものであり，同時期に成立したものであるならば，それは奇しくも西夏王国が存在した時期とちょうど重なる。先行研究によれば，西夏語は王国衰退後も使用されていたとされるため，西夏文書と一緒に出土していることだけで西夏時代のものであるとは確定できない。[34] しかしながら，この写本の存在は，確実に，西夏時代或いはそれ以降にカラホトにおいて中央チベットと同じような内容の仏教伝播があったことを示している。

5　おわりに

以上本稿では，カラホト出土のチベット文書の概要を示し，特にカラホト出土のカダム派に関係する5片の写本の存在について指摘をした。

西夏語の大蔵経にチベット語からの翻訳が多くあることは既に知られる所であり，カラホト周辺から多くのチベット文書が出土していることも西夏仏教へのチベット仏教の影響の大きさを裏付けるものであった。さらに今回明らかになったのは，いわゆる蔵外文献も西夏時代或いはそれ以降のカラホト周辺に伝わっており，その内容は，従来，西夏やモンゴルの仏教と関わりが深いとされてきたカギュ派やサキャ派以外に，カダム派に関するものも含まれていた。これは中央チベットから見れば周辺地域であるカラホトの地に，中央チベットとほぼ同じような内容の仏教が伝わっていたことを示唆するものである。

今後，このカラホト出土のチベット文書に対する研究によって，西夏に伝わったチベット仏教の内容やチベット仏教の伝播の詳細が明らかになることが期待される。

参考文献

KCS：Las chen kun dga' rgyal mtshan (1432-1506), *bKa' gdams kyi rnam par thar pa bka' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me*, TBRC W23748 2593.

LKS：Ye shes don grub bstan pa'i rgyal mtshan (1792-1885) [ed.], *Legs par bshad pa*

bka' gdams rin po che'i gsung gi gces btus nor bu'i bang mdzod, mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang, Zi ling 1995.

PRP : A kya yongs 'dzin dbyangs can dga' ba'i blo gros (1740–1827), *dPe chos rin chen spungs pa'i brda bkrol don gnyer yid kyi dga' ston*. In mGon po dar rgyas [ed.], *dPe chos dang dpe chos rin chen spungs pa*, (Gangs can rig brgya'i sgo 'byed lde mig 17), Mi rigs dpe skrun khang, Beijing 1991, pp. 502–520.

PTG : Lo dgon pa bsod nams lha'i dbang po (1423–1496), *dPe chos rin chen spungs pa'i gsal byed rin po che'i sgron me'am gtam rgyud rin chen phreng mdzes su grags pa*. In mGon po dar rgyas [ed.], *dPe chos dang dpe chos rin chen spungs pa*, (Gangs can rig brgya'i sgo 'byed lde mig 17), Mi rigs dpe skrun khang, Beijing 1991, pp. 355–501.

TG : Thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma (1737–1802), *Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad shal gyi me long*, dGon klung ed., Tokyo Univ. no.107.

井内真帆（2006）「ペルツェク・チベット文古籍研究室編『デプン寺所蔵古籍目録』（新刊紹介）」『佛教学セミナー』83, pp. 16–24.

井内真帆（2008）「後伝期初期のチベット仏教世界—カダム派を中心として—」学位請求論文，大谷大学.

Iuchi, M. (Forthcoming) bKa' gdams pa Manuscripts Discovered at Khara-khoto in the Stein Collection, In B. Dotson, C. A. Scherrer-Schaub and T. Takeuchi [eds.], *Old and Classical Tibetan Studies: Proceedings of the 11th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Königswinter 2006*, Halle: International Institute for Tibetan and Buddhist Studies.

西田龍雄（1997）『西夏王国の言語と文化』岩波書店，東京.

Pagel, U. (1995) The British Library Tibetica : A Historical Survey, In H. Krasser, M. T. Much, E. Steinkellner, H. Tauscher [eds.], *Tibetan Studies : Proceedings of the 7th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Graz 1995*, vol.2, Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien, pp. 439–456.

史金波［著］，ソーハン・ゲレルト［訳］（1999）「西夏文書と西夏史」『史滴』21, pp. 49–55.

Sørensen, P. K. (1999) The Prolific Ascetic lCe-sgom Shes-rab rdo-rje *alias* lCe-sgom zhig po : Allusive, but Elusive, *Journal of the Nepal Research Centre* 11, pp. 175–200.

Sperling, E. (1987) Lama to the King of Hsia, *The Journal of Tibet Society* 7, pp. 31–50.

Sperling, E. (1992) Rtsa mi Lo tsa va Sangs rgyas grags pa and the Tangut background to early Mongol-Tibetan relations. In Per Kvaerne [ed.], *Tibetan Studies: Proceedings of the 6th Seminar of the International Association for Tibetan Studies*, vol. 2 Fagernes, Institute for Comparative Research in Human Culture, Oslo,

pp. 801-824.
Stein, A. (1928) *Innermost Asia: Detailed Report of Explorations in Central Asia, Kan-su and Eastern Iran,* vol.1, 2, Clarendon Press, Oxford.
Takeuchi, T. (1995) KH.TIB. 4 (XT-4) : Contracts for the Borrowing of Barley, *Manuscripta Orientalia* 1-1, pp. 49-51.
Takeuchi, T. (1998) *Old Tibetan Manuscripts from East Turkestan in the Stein Collection of the British Library,* vol.2, Center for East Asian Cultural Studies for Unesco, Toyo Bunko-British Library, Tokyo-London.
武内紹人 (2002)「帰義軍期から西夏時代のチベット語文書とチベット語使用」『東方学』104, pp. 124-106.
武内紹人 (2009)「第三部　チベット文書」吉田順一，チメドドルジ［編］『ハラホト出土モンゴル文書の研究』雄山閣，東京，2009, pp. 200-209.
田中公明 (2002)「西夏・元時代のシルクロード密教とその図像—ハラホト出土の宝楼閣曼荼羅を中心にして」木村清孝博士還暦記念会〔編〕『木村清孝博士還暦記念論集 東アジア仏教—その成立と展開』春秋社，東京，pp. 601-619.
ツルティム・ケサン (2002)「ランリタンパによる修心の教え」『法談』47, pp. 118-122.
ツルティム・ケサン，三宅伸一郎［共訳］(2003)「ポトパの法話集『ベゥブム・ゴンポ』より「どのように善知識を探し，どのように師事すべきか」和訳」『法談』48, pp. 187-228.
Vorobyova-Desyatovskaya, M. I. (1995) Tibetan Manuscripts of the 8-11th Centuries A.D. in the Manuscripts Collection of the ST. Petersburg Branch of the Institute of Oriental Studies, *Manuscripta Orientalia* 1-1, pp. 46-48.

註

(1) 本稿は，11th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (Königswinter 2006) における発表原稿とそのプロシーディングである Iuchi (Forthcoming)，学位論文である井内 (2008) 第4章「カラホト出土のチベット語文書—大英図書館所蔵スタインコレクションを中心に—」を基に加筆訂正したものである。なお，本研究は筆者が2002年から2006年まで武内紹人教授（神戸市外国語大学）の「写本から版本へ：チベット文献における書写様式の推移」（文部科学省研究費特定領域研究A：計画研究）に参加して調査を行ったものであり，この貴重な機会を与えて下さった武内教授に特に御礼申し上げたい。
(2) 現在の中国内モンゴル自治区アラシャン盟エチナ旗（阿拉善盟額済納旗）。
(3) 西夏王国一般については，西田 (1997) を参照のこと。
(4) 西夏文と漢文の図版には，『俄藏黒水城文献』（上海古籍出版社，1996-）や『英国国家图书館藏黒水城文献』（上海古籍出版社，2005-），『中国藏西夏文献』（甘粛人民出版社／敦煌文藝出版社 2005）がある。
(5) 図版は Stein (1928)：CXXXI-CXXXVII に掲載される。
(6) 武内 (2002)：pp. 116-117.

(7) 西夏の仏典と大蔵経については，西田（1997）：pp. 403-491を参照のこと。
(8) 西田（1997）：p. 403参照。
(9) 例えば，Sperling（1987）やSperling（1992）などがある。
(10) スタインの第3次探検により持ち帰られた紙文書には全てIOL Tib Mの請求記号が付されている（Takeuchi（1998）：pp. xix-xxi参照）。ちなみに，請求記号のIOLとは，以前のスタインコレクションの所蔵セクションであるIndia Office Library and Recordsの略である。スタインコレクションの所蔵セクションの変遷については，Takeuchi（1998）：xixとPagel（1997）を参照のこと。
(11) 同機関にはロシア語による目録がある。コズロフコレクションのチベット文書についての個別の研究に，Vorobyova-Desyatovskaya（1995）とTakeuchi（1995）がある。なお，コズロフコレクションの中の数点は，エルミタージュ博物館 Ermitazh Museum（サンクトペテルブルク）に保管されており，同博物館は主に仏教絵画等を所蔵する。
(12) 筆者は，2004年12月に同機関を訪れ，約100点のチベット文書を確認したが，全体数については不明である。なお，史金波（1999）：p. 51によると，ロシアに保存されているカラホト出土文書は約15万頁以上，その中の90パーセントが西夏文で，次いで多いのが漢文，チベット文は少数であるという。
(13) Takeuchi（1995）：p. 49参照。
(14) 内モンゴル文物考古研究所所蔵のチベット文について，武内（2009）において3点が紹介されている。
(15) 例えば，E.G.023.ffは，ロプサン・ツルティム・ギャムツォ Blo bzang tshul khrims rgya mtsho（1845-1915）著の *rJe btsun sgrol ma'i gsang mchod* と比定されることから，E.G. 番号の文書には20世紀のものも含まれると思われる。
(16) K.K.Iには，K.K.I.iからK.K.I.xまである。
(17) 出土地の見取図であるStein（1928）：plan 18を参照のこと。
(18) IOL Tib Mの中にも西夏文書が紛れ込んでおり，その文書番号はK.K.V.b.013.nである。
(19) 田中（2002）が取り扱うコズロフコレクションに含まれる「宝楼閣曼荼羅」（エルミタージュ美術館蔵）もこの仏塔から出土したものと思われる。
(20) Stein（1928）：pp. 446-447, plan 17, 22を参照のこと。
(21) IOL Tib Mの中にも西夏文書が紛れ込んでおり，その文書番号はK.K.II.0303.aである。
(22) 2言語文書の文書番号はK.K.I. ix.017.t.iである。
(23) 初期カダム派祖師の1人。カシミールや東インドなどに赴き翻訳を学んだ。サンプ・ネゥトク gSang phu sne'u thog（1073年建立）の座主も務めた。KCS：ff. 76a6-77b3参照。
(24) 文書サイズは，縦61.0 cm x 横8.0cmで，2葉から成ると思われるが，最初の1葉は欠落している。奥書からゴクの著作であることがわかる。奥書を示せば以下の通り。rgyud bla ma'i bsdus don lo tsa ba dge slong blo ldan shes rab kyis sbyar

pa// // rdzogs s+ho// (f.2b6)

(25) カダム派の開祖。総本山ラディン Rwa sgreng 寺を建立した。KCS：ff.83b2-105b4参照。

(26) ドムトンパの主要な弟子を指す「クムチェースム（御三兄弟）」sku mched gsum の１人。KCS：ff.215b4-222b2参照。

(27) テキストは Iuchi（forthcoming）において全文を掲載している。

(28) ツルティム，三宅：(2003) p. 189参照。『ペチュー』と『ベゥブム・ゴンポ』については，TG：ff.13b6-14a3に簡潔な解説がある。それによると，『ペチュー』には略本・中本・広本の３種類があるとされ，その編者はいずれもポトワの弟子たちで，タプパ Grab pa（ポタンディンパ・ションヌ・ウー Pho brang sdings pa gzhon nu 'od, b.11c.）が編纂したものを略本，ダクカルワ Brag dkar ba（1032-1111）が略本を基にして且つ善知識（ポトワ）に聞いた喩えをさらに加えて編纂したものを広本，チェゴムパが先の２つに基づいて理解しやすく著したものを中本（『ペチュー・リンチェンプンワ』）という。一方，『ベゥブム・ゴンポ』も，ポトワの説法をトルワ・シェーラプギャムツォ Dol ba shes rab rgya mtsho（1059-1131）が編纂したものにハディガンパ lHa 'bri sgang pa（12c.）が註釈をしたものである。

(29) ツルティム（2002）：pp. 118-119参照。gsung は「ラマのお言葉」，thor bu は「散らばったもの」を意味する。カダム派以外でも，例えば，プトン Bu ston rin chen grub（1290-1364）のスントルブ，*Bu ston rin po che'i gsung thor bu*（『プトン全集』*Bu ston gsung 'bum*，ショル版26巻（la）に収録）など，他宗派の祖師のスントルブも多数存在する。

(30) 筆者は，2006年に行った口頭発表において，スントルブ文献の可能性のみを指摘したが，以上のような特徴はカダム派の初期の著作全般に見られることであるので，他の文献である可能性も指摘しておきたい。

(31) LKS：pp. 562-615に収録される。

(32) チェゴムパの生没年は Sørensen（1999）に従った。チェゴムパの単独の伝記は存在しないが，『ペチュー・リンチェンプンワ』の註釈（PTG：pp. 358-359と PRP：p. 518）によれば，チェゴムパは，ポトワの弟子のゲシェー・ダクカルワを師に持つチャンチュプ・ナンワ Byang chub snang ba の弟子であった。カダム派の中でもポトワの系統，いわゆるシュン派 gZhung pa に属する人物である。

(33) 同じくチェゴムパが編纂した新出のスントルブの著作 *bKa' gdams thor bu ba zhes bya ba zhes ba'i man ngag*（18葉から成るウメ体で書かれた写本）が，ダライ・ラマ５世 Ngag dbang blo bzang rgya mtsho（1617-1682）の秘蔵書であったデプン寺 'Bras spungs（ラサ）のネチュ・ハカン gNas bcu lha khang より発見されている。なお，『デプン寺所蔵古籍目録』（民族出版社，北京，2004）にこれは収録されていないが，特別にペルツェクチベット文古籍研究所 dPal rtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang（チベット自治区ラサ市）から写本の閲覧を許可して頂き，確認することができた。ネチュ・ハカンの蔵書については，井内（2006）を

参照のこと。

(34) Vorobyova-Desyatovskaya (1995)：p.46によると，西夏語は西夏王国滅亡後も使用され，16世紀中頃まで使用されていたと考えられるという。田中（2002）：p.602にも同様の指摘がある。

参考図版：K.K.V.b.021.c. (IOL Tib M Vol.01 fol.52)

ka, 49a

※Web 非公開

ka, 49b

※Web 非公開

（C）The British Library